

田沢仁先生の御退官によせて

新 免 輝 男 (植物学教室)

田沢先生は植物膜における輸送現象を主とした研究を続けてこられたが、それ以外にも植物生理学の大変広い範囲に深い造詣を持っておられる。その大きい理由の一つはお若い頃のご経験にあるように思われる。先生は学生時代を含めて東大に移られるまでのほとんどの期間を大阪大学理学部の神谷宣郎（現学士院会員）教授の研究室で過ごされ、水やイオンの輸送などに関する研究を続けられた。神谷研究室の主要テーマであった原形質流動に関しても素晴らしい業績を残しておられる。その間に西ドイツに留学され、生物の内生リズムの提唱者である Bünning 教授の研究室および、植物組織培養からの不定胚形成に関して第一人者である Reinert 教授の研究室を経験されている。また、ある時期には名古屋大学理学部の大沢文夫研究室に内地留学され、奏野節司（現）教授と真性粘菌の変形体からのアクトミオシンの単離という生化学的な研究も経験されておられる。このように、多分野にわたる研究で培われたご経験は今も先生の中に生き続けており、セミナーや学会などでしばしばご造詣の深さに驚かされる。東大におけるこの十数年間の田沢研究室の研究の方向性を決定的にしたのは、車軸藻類の細胞を用いた細胞内灌流法の開発であったと思われる。細胞本来の機能を損なうことなく細胞内の化学組成を制御で

きるこの方法の開発は植物細胞の膜生理学および原形質流動の研究に画期的な貢献をした。東大の田沢研究室における研究の多くが、細胞内灌流法を中心として進んできた。

田沢先生は昭和52年に東京大学理学部植物学教室に教授して赴任された。その頃は理学部二号館は改修の最中であつたが、先生は赴任されて直ぐに改修の責任者になられた。赴任直後でよく状況が解らないこともあり随分苦勞されたことと思うが、無事に役目を果たされた。常に何事にも臆することなく取り組まれるお姿には本当に脱帽してしまう。このようにタフな田沢先生も一時は吐血されて好きなお酒もめしあがれないような危機的な状態があつた。第一の原因はご心勞であり、酒がこれを加速したのではないかと思っている。その危機的な状態からの回復も驚くほど早かつた。昭和64年度で教室主任の任期を終えられることになっていたので、ご退官前の一年は少しゆっくりされて、実験も始められるのではないかと期待していたが、幸か不幸か評議員に選ばれてしまった。これで弟子達の期待は完全に打ち崩されてしまった。毎日が会議の連続で、教授室でゆっくりと椅子に座っておられるのはほとんど見たことがない。相変らずのタフさで多くの問題に取り組んでおられた。特に、技官問題には多くの時間を費やして

おられ、会議や団体との交渉のみならず、お忙しい時間をさいて技官の有志との話し合いを続けておられた。技官問題の解決は今直ぐという訳にはいきそうにないが、田沢先生は技官の自立ということを心から期待されているようである。

ドイツに留学されたこともあって、先生は大の親独派であり、西ドイツとの植物学の交流に努力しておられる。また、この一月からは日本植物生

理学会の会長として日本の植物生理学のために働いておられる。恐らく、田沢先生はご退官後も暇になられるということはないと思うが、ストレス解消用でなく、楽しみとしての酒をお飲みになりながら、これまで忙しくて諦めておられた実験を楽しんでいただきたいと弟子として望むばかりである。